朝日 俳壇 歌壇

長谷川櫂選

学校が標的になるガザの夏　（筑紫野市）二宮　正博

大夕焼日本海は火の海に　（神奈川県松田町）山本けんえい

死の大義生に八月十五日　（東京都世田谷区）松木　長勝

爽やかに心配謝絶する朝ぞ　（船橋市）斉木　直哉

落選の夫婦黙つて草むしる　（戸田市）蜂巣　厚子

アラン・ドロンなきフランスや秋の雨　（伊賀市）福沢　義男

海賊船孫と揺られて夏の海　（小城市）福地　子道

☆夏蝶のぐんぐん人を引き離す　（静岡市）松村　史基

あの日には戻れぬ吾の帰省かな　（埼玉県宮代町）鈴木　清三

外つ国の水泳選手花の文身　（新潟市）鶴巻　悦子

【評】一席。まるで民族浄化を狙うかのような。かつて「された」人々が。二席。すばらしい夕焼け。されど暗澹たる不安。三席。死に大義名分があった戦前。戦後は生に。十句目。なんとまあ、アッケラカンと。されど見入ってしまう。

大串章選

☆聖火消え戦火消えざる残暑かな　（横浜市）一石　浩司

秋風鈴異常気象を嘆きけり　（倉吉市）尾崎　槙雄

初採りの西瓜赤子のやうに抱く　（戸田市）蜂巣　厚子

幼子に誰もかなはぬ踊かな　（さいたま市）齋藤　紀子

廃村の百戸最後の踊かな　（尾張旭市）古賀勇理央

聴覚に触覚に秋来たりけり　（武蔵野市）相坂　康

軍服の遺影の三人秋彼岸　（前橋市）荻原　葉月

露の世に負けるな我も障害者　（船橋市）斉木　直哉

米櫃に米ある暮らし赤のまま　（諫早市）後藤　耕平

ふる里の山迫りくる帰省かな　（岩倉市）村瀬みさを

【評】第1句。パリオリンピックは無事終了したが、ロシアとウクライナ、イスラエルとパレスチナの戦火は今なお続く。第2句。立秋を過ぎても猛暑が続く。秋風鈴も溜息をつくばかり。第3句。丹念に育て上げた西瓜。「赤子のやうに」が好い。

高山れおな選

商談に負けて南瓜を睨みをり　（香芝市）土井　岳毅

年金と詩歌にて足る生身魂　（成田市）神郡　一成

化け猫の中は地獄の夏芝居　（大阪市）上西左大信

ナイアガラ花火やばいと言ふ五歳　（寝屋川市）今西　富幸

断層写真脳とトマトは相似たる　（高砂市）小柳　献爾

花火師や火の粉の中に仁王立ち　（神戸市）藤井　啓子

開演前暗き舞台に微かな涼　（和歌山市）新谷　慶子

ステテコの巡査部長の王手かな　（横浜市）生田　康夫

☆聖火消え戦火消えざる残暑かな　（横浜市）一石　浩司

☆こんな物までぶら下げて鳥威　（東かがわ市）桑島　正樹

【評】土井さん。深刻な場面のようだが、笑ってもいいの？　三橋敏雄に〈あぐらゐのかぼちやと我も一箇かな〉。神郡さん。つましくも心豊かに。上西さん。中の人には気の毒としか言いようがないが、「化け猫の中は」という具体性が絶妙。

小林貴子選

人生は端居だつたと納得す　（秩父市）浅賀信太郎

もがけども蹠けども蟬牽かれゆく　（下関市）清水　幽人

産院の土用蜆の朝餉かな　（飯能市）細田　裡子

水中眼鏡小魚となら話せさう　（京田辺市）加藤　草児

天津甕星恩ひ遣る星月夜　（東京都江東区）原　千弘

☆こんな物までぶら下げて鳥威　（東かがわ市）桑島　正樹

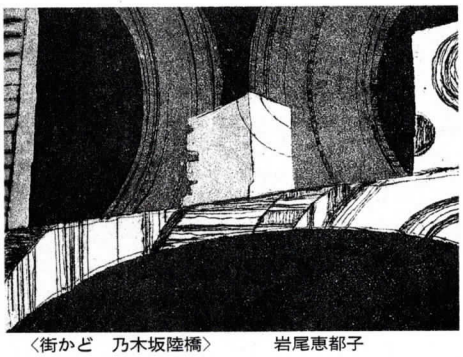
花火舟ゆふぐれゆとりありにけり　（大崎市）宮嶋　孝

もう空はすつかり秋の色だけど　（我孫子市）森住　昌弘

☆夏蝶のぐんぐん人を引き離す　（静岡市）松村　史基

窓に家守の影バンクシーのごと　（朝倉市）足立　修三

【評】一句目、夕方、縁側で涼を取る夏の季語「端居」。これ即ち人生。二句目、蟻が蟬を運んでゆく。それが生きている哀れ。三句目、春の季語「蜆」とは趣の異なる、夏の「土用蜆」の滋養が効く。四句目、何を語ってくれるのか聞きたい。



〈街かど　乃木坂陸橋〉　岩尾恵都子

うたをよむ　惜しみなく励みあう

高田　正子

8月末、俳句甲子園の審査員長（計13人）の一員として松山市へ行った。優勝は名古屋高校であったが、私が初めて参加した2年前も、名古屋高校の試合を見た。そのときは対戦相手だった東京の海城高校が勝ったが、2校の白熱するディベートは、アーケード会場の暑さを忘れさせてくれるものだった。若くもなく、さして頑健でもない私が、年々厳しくなる残暑をほいほいと松山へ向かうのは、このときの衝撃のおかげに違いない。

さて松山へ集ってくる高校生たちも支える大人たちもあっぱれであるが、年々進化する大会運営のシステムとスタッフの働きにも目をみはる。スタッフの多くはOB・OGであるから、この大会は高校生と元高校生によって成り立っているともいえる。中には、さらに変化し続け、句集をまとめるなど、俳人として確かな足跡を残す人たちもいる。

旅いつも雲に抜かれて大花野

この句で大会の個人最優秀賞を受けた岩田奎は『膚』（2022年刊）で俳人協会新人賞と田中裕明賞を受賞した。安里琉太は『式日』（20年刊）で俳人協会新人賞を受賞。次の句が鮮烈だ。

遠泳の身をしほがれの樹と思ふ

後にもまだまだ若き才能が続く。

掌が桃を離れて柔らかき　黒岩徳将

山吹の散り浮く沢に漱ぐ　若林哲哉

俳句の未来が懸念されて久しいが、若い俳句は今日の次に明日が来ることを確信させてくれる。今に集中せよ。未来は当然その先にある。惜しみなく励みあう姿はまぶしい。今年もたっぷり熱量をもらった8月。

（「青麗」主宰・俳人）

風信

五島高資句集「星辰」　第5句集。著者18年ぶりの句集で、333句を収録した。「かなかなや魂のずれととのへる」「石を積む月の光となりにけり」（角川書店・2970円）

坂口昌弘著「忘れ得ぬ俳人と秀句」　俳人論集。村上鬼城、富安風生、阿部みどり女、村越化石、川崎展宏、石牟礼道子ら物故した40人を紹介。（東京四季出版・2200円）

☆は共選作。入選作はデジタル版にも掲載・収録し、記事やSNSで引用することがあります。投稿は未発表の自作のみ、二重投稿不可。選者が添削する場合があります。郵便での投稿は無地のはがき1枚に1作品、横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104-8661 晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。歌壇はネットでも投稿できま